

江戸末期の気温平均17度でした

オランダ商館の記録発見

気象学会 都立大教授が発表

江戸時代末期に長崎・出島のオランダ商館で記されていた気象観測記録がオランダで見つかり、二十一日、仙台市で開かれている日本気象学会で東京都立大学理学部の三上岳彦教授が「当時の気候変動を知るうえで貴重な資料」と発表した。日本で近代的な気象データが継続して記録されるようになったのは、明治時代に入ってから。江戸時代の本格的な記録が明らかになるのは初めてという。

これまでに見つかった記録は、一八四五年から五八年（五七年は除く）までと一八七一年から八〇年まで。出島にあったオランダ商館の医師が毎日午前六時と九時、午後三時半と十時の四回、気温、気圧、湿度、降水量をはじめ風向、風速、雲量など、現在とはほぼ同じ項目について観測、オランダ語で記していた。

オランダ王立気象研究所のグンター・コネン研究員が研究所の図書室に眠っているのを発見、コネンさんが今年五月に記録のコピーをもって来日した。

三上教授はこの記録の分析を始めたばかりだが、一八四〇年代から五〇年代にかけての年平均気温は約一七度と、二十世紀前半より一度程度高く、今と同程度であることがわかった。

十六世紀から十九世紀末にかけては世界的に気温が低い時代だったが、三上教授らが日本各地の藩日記などに残されている天候の記載などをもとに当時の気候を推定した結果、一八五〇年ごろに気温が高い時期があったらしいと見られていた。今回、この推定が裏付けられた形だ。

近代的な気象観測は西欧では十八世紀後半から盛んになったが、日本で組織的に行われるようになったのは、一八七二年からの函館が最初。一八七五年に気象庁の前身の東京気象台が設立された。

江戸時代の観測記録としては、やはりオランダ商館員だったシーボルトが一八一〇年代から二〇年代にかけて残した記録のコピーが、東京の東洋文庫にあるが、詳しい内容はまだ調べられていない。

三上さんは「出島での観測は十九世紀 初めごろから行われたものと見られ、今回見つかった記録以外にもまだ残っているのではないかと。出島での観測数値があれば、江戸時代の気候変動の様子が、より定量的に議論できる」と、残りの記録発見に期待をかけている。

(朝日新聞 1998.10.21 夕刊 12面3版 を転載。)